

# Mail Box

前略 会員の皆様へ 〈第5信〉

WSFジャパン代表

三ッ谷洋子



皆様お変わりありませんか。アトランタ・オリンピックに行かれた方もお茶の間観戦組も、手に汗を握った2週間だったと思います。

## 今回は「私とオリンピック」と題してみました。

このテーマで、オリンピックにまつわる私の個人的な思い出の断片を、ご披露したいと思います。

**1972年・札幌冬季大会** スポーツ記者、2年目でした。スキー距離競技の日本のトップ、千葉弘子選手の目標は、世界の第一人者でママさん選手のカヨスマの名をあげました。「結婚しても出産しても現役生活を続けたい」という千葉選手の言葉に、私は自分の将来を重ね合わせて、とても素晴らしい目標ですね、と相づちを打ちました。しかしその後、彼女は結婚して引退してしまいます。独身だった私はほんとうにガッカリしました。女性が結婚すると、自分の夢を追いつけるのは無理なのかと…。(その後、彼女はコーチとして復帰しましたが。)

**1976年・モントリオール大会** 3歳になったばかりの息子にオシメを背負わせて、カナダの西から東まで1ヵ月半をかけて列車で横断した後、大会取材しました。新聞と専門誌のために、街ダネとバレーボールの観戦記を書くためです。確か夜の9時半に試合開始という、とんでもない日程の日です。ようやく息子を寝かしつけ、夜半近くに仕事を終えてホームステイ先の家に戻ると、息子がいない。この夜に限って目が覚め「ママがいない」と泣き出してしまったため、この家の人が散歩に連れ出してくれたのでした。ママさん記者は大変でした。

**1980年・モスクワ大会** 日本は米国のボイコット政策に賛同し、オリンピック不参加を決めました。その直後、私は「オリンピックを迎えるソ連のスポ

ーツ事情」取材のため、モスクワほかいくつかの都市を訪れました。その一つ、黒海とカスピ海にはさまれたグルジア共和国(当時)のトビリシに到着した時のことです。一人の男性が両手を後ろに回して笑顔で近づいて来ました。「ようこそ」といって差し出したのは、一輪の大きなガーベラ。はるか極東の国、日本からやって来た女性記者を迎える担当者の心づかいに感激しました。

**1984年・ロサンゼルス大会** 初めて陸上競技で女子3千メートルとマラソンが実施されました。大会の少し前、マラソン第一人者のグレテ・ワイツ、3千メートルのメアリー・デッカーらが「オリンピックに女子の5千、1万メートルがはいっていないのは性別で違法である」と、IOCなどを訴えていました。彼女たちの運動を支援した米国の団体(名前は失念しましたが)は、黒人やマイノリティーの人権問題に積極的にかかわっているグループであることを、米国人の友人から聞きました。私たち女性は社会のマイノリティーであることを初めて認識させられた、一つの出来事でした。

**1988年・ソウル大会** 選手村を見学していると、向こうから友人のラスティ・カノコギが歩いて来ます。彼女は第1回の世界女子柔道選手権を自力で開催し、また、女子柔道のオリンピック入りに尽力した。 「バルセロナ大会から、ついに正式種目になるのよ。あなたのお陰よ」と感謝されました。WSFジャパンで日本女子選手の署名運動をお手伝いした成果を、抱き合って喜びました。

**1996年・アトランタ大会** 女子選手的大幅な増加と活躍が話題でした。ところがバルセロナ大会では4人いた日本選手団の女性本部役員が、今回はたったの1人に。IOCは男性ばかりの組織運営の異常さに、まったく気付いていないのです。